

窪田空穂

——その文学観の変遷——

大阪空港発花巻行は日本アルプスの上を過ぎる。左に穂高が雲の上に見える。その麓の信州新村に生まれた空穂は朝夕、その姿を仰いで育った。

「他所から来たものは、あれは何という山か、と聞くのだが、そんな低い山には名前なんかないのだ。アルプスは軒のあたり、こんなふうに……」と煙管を眼の少し上くらいに水平に差し出して、空穂は言った。空穂の『日本アルプスへ』（大五）は小島島水とならぶわが国初期の山岳紀行である。鎗が岳の鎌尾根をたどり、天の最中に、と空穂は歌に残している。

機は松島湾のあたりで高度を落として、花巻空港に着陸する。花巻から四〇分で盛岡に着く。夕方、私は啄木新婚の家を訪れた。啄木は、空穂の新詩社の友人である。啄木のその家には筆で書いた軸なんか掛かっているが、啄木の半折などはなかったであろう。「啄木というけれども、その頃は、それほど知られているわけではなかった。誰か短冊でも買ってくれぬか、と啄木は言ったものだ」と空穂は言った。啄木の歌碑は多く活字体か、ノート

村 崎 凡 人

の拡大で、それがほんとうであろう。「啄木はいつも俺にはわい談ばかりした、と吉井勇が言っていた。吉井にはそういう話をしたのだらう」と空穂が言ったことがある。また「蟻んこでも……と空穂が言った」と春秋社長神田竜一氏が言ったことがある。人間は本来動物なので、それをどう飼ひ馴らすかが、人間形成の底にあるのではないか。記録を資料の文学論でなく、肉体と息吹の感じられるものが書ければというのが、この度の私の試みである。それには旅先もいだらう。今は花巻温泉の一室で書いている。

空穂は『明日の短歌』（昭二三）のなかで

歌は新に自分を見出いだすために作る。

歌は主観が緊張してなるもので、真実性、客観性が必要である。

歌には境涯の歌と絶対の歌がある。境涯の歌は風物の中に作者の精神が入ったもの。絶対の歌は作者の心がそれ自らで思つて他に煩わされない、卒然として触れたものと合体してな

つたもの。

作者より下に見て歌を作るようになった。

長年歌を詠んできたが、歌をつくらうと思つてでなく、生活実感を歌の形をかりて表現したものだ。

と述べている。だからここに文学観と副題をつけたけれども、人生観と置きかえてもいい。

私は先に『評伝窪田空穂』（昭二九）で、昭和二八年（七七歳）までの空穂を書いた。明治書院『現代日本文学大事典』（改版）で『老櫓の下』（昭三五、八四歳）までを、また『信濃教育』（昭五五、六）で晩年の空穂を書いて、私にとって宿題であつた空穂が老と死をどう思つたかをたどつてみた。

私は今年、昭和五七年は明治二一五年と知っているのは、『評伝』を書いた習慣からきている。空穂は明治一〇年生れで、空穂に接する人とあうとき、明治何年生れかを聞いて、空穂との関わりを知つた経験からきている。空穂は昭和四二年四月一二日になくなられたが、私はその後も昭和を明治に換算してきた。空穂が生きていたら、今年一〇五歳になる。圭子夫人は、それより一八年若く、私は夫人より一八年少い。つまり私は空穂から三めぐり下の丑年になる。記憶にある空穂は、あれから一五年経っている。空穂は今では、伝記の対象として眺められる地点にある。その空穂を心の軌跡を中心に描いてみたい。

一、成立

空穂の文学観（人生観）の形成には、少くとも七つの要因があ

ると思う。それは、(1)郷里信州、(2)父寛則および小学校の師矢ヶ崎奇峰、(3)与謝野寛と「新詩社」、(4)牧師植村正久、(5)禪、特に釈宗演、(6)坪内逍遙先生、(7)田山花袋と自然派小説である。

(1)、郷里信州のことは冒頭であつた。空穂の心の底にあるのは信州の農民の魂である。小庭の本草の歌が多い。

命あれば育たねばならぬ本草ども静かなる庭のこの忙しきや
（『郷愁』昭二二）

と歌っている。晩年（昭四一、九〇歳）の床に「寒夜郷里をおもふ」と詞書して

雪に白き北アルプスの峯近く信濃の冬の星きらめかむ（去年の雪）昭四一）

とうたつた。

(2)、父寛則と師矢ヶ崎奇峰。幼少時の影響は父寛則であろう。

空穂の生家には母屋に向つて右に庭をへだてて、縦にやや長い平屋の一棟がある。農作業工場で、この庭に水を引いて、水車を廻した。寛則は朝起きると、この水で漱をした。東京に津田仙（梅の父）を訪ねて、西洋人が骨を捨てたところの草がよく伸びた、という話をきいて帰つて、牛の肉を扱う人から骨をもらつて、工場で粉碎して、畑にまいた。窪田の家では骨を集めているというので悪評が立つたが、農業の科学化を信州で説いた初期の人である。

空穂の人生の師は寛則であつた。困つたことがあると、父なればどうするかと思つて処した、と聞いたことがある。

寛則は歌を内山真弓（香川景樹の高弟）に習った。

死期来なば先づ第一に親に謝し我はこの世を立ち去りぬべき

（『本草と共に』昭三六、八五歳）

と歌っている。

和田小学校の教師に矢ヶ崎奇峰がいた。正岡子規と文通のあった俳人で、幼い空穂の文学の芽生えに影響があった。

空穂は和田村から松本中学に通うのだが、あるとき、私が空穂にきいた。郷里にいられたときの、いちばん強い印象は何でしたか。「それは透谷の自殺だろうな」と空穂が言った。「女学雑誌」の巖本善治、「文学界」の北村透谷のキリスト教的社會観は、当時の空穂にとって新鮮な光のようであつたであらう。

ここで空穂は、父母の許しなく上京して東京専門学校に入学するが力不足を感じて中退する。私が『評伝窪田空穂』を出して、暫くして空穂を訪ねると、「俺は今日は不愉快なんだ」と言つた。机上に『評伝』のやや前部が開かれて、のつてゐる。空穂が中退後、大阪の株屋に奉公したことは、私は前田晁氏からきいた。空穂の作品の中に、そのヒントがあるのだ。明治四一年四月、国木田独歩の病床を慰める『二十八人集』が出ていて、空穂は短篇「母」を書いている。その初めに、母の危篤をきいて大阪から帰つた、とある。なぜ、と前田さんにきいて、わかつたのである。

(3)、与謝野寛と新詩社。郷里に帰つた空穂は、島立小学校、引きつづき和田小学校で代用教員をする。「お前は猫のしっぽ」と祖母に言われて育つた。農村の末子は養子にゆかねばならぬ。いったが、帰つてきた。このてんまつは空穂は多く語らない。が、

短篇がある。病院で、女が階段の上について、出会う。一瞬、とまどつた女は、一気にかけて降りて、男の傍をかけぬけて、玄關の夫に迎えられて帰つてゆく。この場面は、そういうときの空穂であらう。後年、日本女子大学に入学した若い娘が空穂を訪ねるが、早生した、と前田晁氏からきいた。どこまでが真実かわからないが、あつてわるいことではない。空穂はけつして單純ではない。空穂はよく、歌は單純化といつたが、單純化された歌に深みと魅力があるのであらう。

与謝野寛との出遇いは、小学教員時代の空穂の投稿からはじまる。和田小学校の教員に太田水穂がいた。長野師範出の正教員で、歌会「此の花会」を主宰してゐた。空穂は宿直をひきうけて、懷に藤村『若菜集』を入れ、『万葉集略解』に親しんでいた。『若菜集』は何冊か買つて、人に与えた、と空穂が言つた。空穂の心は新体詩にあつた。新聞「日本」の子規選（明三三）に「うつほのや」の号で取られた。三月から「文庫」の選者が寛となり「小松原春子」でとられた。空穂が思ったことは、自分が真に言わずにおられぬことを言えばよい、ということであつた。三三年四月、寛は「明星」を発売し、空穂の「文庫」への投稿歌は「明星」にのせられ、寛から社友になるようにとの手紙がきた。

秋、空穂は補欠試験を受けて東京専門学校の英語及び国語漢文科二年に入学する。

折口信夫は、短歌雑誌の対談で、明星時代の窪田君は花形選手でした、と言つてゐる。空穂たちの文学批評の尺度は「触れてゐる」ということで、人生の真実に触れて、その飢えを満たしてく

れるか、どうか、ということであった。

明治三四年夏、空穂たちは新詩社を退社する。「文壇照魔鏡」を私はもっているが、また、新詩社の遊戯的な気分と同調できなかったからだと「事典」に書いたが、これだけが、石川啄木、吉井勇らの連袂退社の原因ではなからう。「明星」に挿画を描いていたそして空穂と親しかった一条成美が寛から提携を断られたこと、友人水野蝶郎（葉舟、一九歳）と晶子（二四歳）の仲を寛が疑って蝶郎を追放したことなどがからまっている。——新詩社では簗碑雨といった光太郎は、花巻に疎開した。夕方、私はその住居を訪ねてきた。荒壁の一室で、その上に村人が造った套屋がかぶさり、さらにその上に新たに鉄筋の套屋をかぶせている。これはここから近い平泉の金色堂の輪堂の発想ではなからうか。雪深い山際に戦後の六四歳から七一歳まで一人で住んだことは大変だったであろう。ところで、「高村さんという人は、ずいぶんわがままな人で、村人をこき使ったそうです」とマッサージの女人が言った。文学に関わりがない村人には光太郎はするように映ったであろう。空穂たちの新詩社退社も、たんなる文学上の理由だけではなかったであろう。

(4)、牧師植村正久。水野葉舟、吉江喬松、空穂は牛込で共同生活をした。葉舟の父は銀行重役であったが、喬松には家庭的な悩みがあり、牛込教会に植村牧師の説教をきいた。空穂によると植村先生という人は、接する人を全部、キリスト者にするという熱意があったようである。近頃の空穂特集の短歌雑誌を見ると、空穂受洗のことがでているが、喬松は洗礼を受けたが、空穂は受け

なかった、ときいている。念のため、さきほど空穂夫人に電話して、このことを確かめた。空穂は、いまま神式である。

植村正久について、空穂に残ったことは、動機さえ正しければ小さいことにも価値がある。また、与えられたことは、つまりぬくことも奉仕の心をもってすれば、それを通して自己を高めることができる。また、神はいつまでも試みるものではないということ、空穂にとって救いとなった。

空穂の『まひる野』（明三八年九月）は詩を重んじて歌は多く捨てた。「文庫」の歌からは一首しかとつていない。それは盗人のさわぎはやみて山里の夜の明け方を雪降り出でぬである。

『まひる野』の評価について空穂にきいた。植村先生に持参した。「先生は、鼻先きで、ふん、といったよ、それだけだ」と空穂が言った。

空穂は「植村先生は食事を共にすることはかりそめではない、と言われた」と言った。じつさいよく御馳走になった。神田川の鰻であったり、近くに出来た中華料理店の焼きそばであったりした。

空穂は晩年、多くのキリスト教の心と神の歌を残した。のちにふれるであろう。

それから三人の共同生活は解散する。理由は「飯たきにやとった女中がいた。年上できれいではなかったが空穂にはれたらしいんだ、」と前田晃が言った。

(5)、禪、特に釈宗演。空穂は、神田の義兄、市岡伝太によって

鎌倉円覚寺管長釈宗演に参禅する。あるとき、牛込の戦災跡のやや建ちかけたあたりを、章一郎氏と歩いたときに、門からすこし下りになった寺を示して、幼い章一郎氏をつれて、空穂は、この寺に法話をききにきた、と話された。

佐々木指月は高村光雲の彫刻の門弟だが、同じく参禅して、アメリカに布教した。太平洋戦争となつて、捕虜収容所にいる指月を救出するために、禅の弟子である米夫人が結婚した。戦後、指月、彼の地に没する。夫人、指月の遺品を携え、立野信之氏に伴われて、空穂を訪ねた。「来たよ。そこに坐つて、ワタシ、シゲツサン、オクサン、と言つたよ」と空穂が言つた。夫人は京都の禅寺に住んだことがグラフ雑誌にのつた。そこに没したと新聞が小さく報じた。

釈宗演を機とする空穂の禅は浅いものではない。空穂の歌にある一見平凡で、広い境地、自然主義に似て深い人生観を写したものは禅に通じるものがあろう。

眼もて追ふいさささ波ひろがりて見よ内海はすべてさざ波
（『冬日さし』昭一四）

というような歌にも、私はそれを感じる。

中村白葉先生は、ある意味で空穂の弟子であるが、空穂の宗教性として、次の歌を引いている。

天地はすべて雨なり紫の花びら垂れてかきつばた咲く（『冬木原』昭二七）

松本の城山公園に歌碑がたつたとき、空穂、若山喜志子と白葉が話をした。チエーホフはくろうとの小説読みの味、と白葉は言

つた。筋はないが人生の味がある。空穂は、歌を作るうえで、苦心すると言えば、何事もない歌をつくることだ、と言つたことがある。

空穂の書斎にはいまも鈴木大拙が、空穂にかいた「不生」の軸がかかっている。大拙との出あいは春秋社長神田竜一氏による。この軸をかけたころ、空穂は「不生は不滅と同じだ、」と私に言われた。神田氏は宣伝ずきの禅僧より、空穂はすぐれていた、と言つた。

⑥、坪内逍遙先生。昭和一二年春、空穂の遺曆のお祝いに、弟子たちが、何がいいか、と空穂にきいた。印田の煙草入れ、ということになつて、空穂から半折を書いていただくことになった。卒業して、まだ職の決つていなかった私が、空穂夫妻に従つて伊豆山温泉で、墨磨り発送の役を命じられた。空穂は宿のどてらを着て、筆を持つ手を見つめて、口をつぼめて書いた。

この折、空穂夫妻に従つて熱海に坪内先生の墓参をした。

学生の空穂たちに逍遙が説いたことは、古典と創作との関係は、昨日と明日のごときものである、ということである。古典は過去のためにあるのでなく、今日、および明日のためにあるのだ、ということである。これは、のちに空穂の古典評釈の精神となる。また、歌としての文芸でなく、文芸としての歌、俳句、古典ということである。

空穂は大正九年。早稲田大学講師となる。空穂が逍遙にあったとき、逍遙はあんたは私の万葉集の先生ですよ、と言つた。空穂の『万葉集選』が大正六年に出ていた。

(7)、田山花袋。明治三五年、同人雑誌「山比古」創刊。蒲原有明、小山内薫、国木田独步（「運命論者」）、田山花袋寄稿。三十七年七月卒業。学生時代から短歌の選をしていた電報新聞（後に東京毎日新聞）社会部記者。三十九年七月退社。婦人欄の身の上相談を持ったが、男女のことが多く、注意があった。人間の本質はこの問題において何があるか、と言って空穂は止す。八月、独歩社入社。独歩書翰集に、独歩から橋松あて、うつぼ君に適不適論を言わないで入社を勧められたい、という書信がある。この社で、

薫、小杉未醒（放庵）、松岡国男（柳田）、花袋と交わる。三月、「文章世界」創刊。花袋、晁編集、空穂歌欄選者。翌四〇年、花袋「蒲団」発表。この頃が空穂の自然主義時代である。空穂は明治三五年「山比古」に短篇を発表するところから、大正四年、歌集『濁れる川』まで、二六歳——三九歳ころまで、十余年間、小説が中心となる。

花袋の平面描写は熊谷直好の歌論からきていると、花袋がいった。花袋は手の平をひろげて、これが家、これが森と言った。平等に扱うところに自然主義の写生がある、とした。花袋の歌論からの影響については稲垣達郎氏に研究がある。

空穂の『評釈伊勢物語』はこの間（大元）に出ている。空穂は『伊勢物語』を短篇集として眺め歌物語と名づけた。

これで、空穂の文学精神の成立に影響のあった要因を大観した。

次にはその変遷のあとを歌集の作品傾向を中心にたどってみよう。

二、変遷

処女詩歌集『まひる野』（明三八）は詩に重きをおいたロマンティックな抒情詩である。有名な「鉦鳴らし信濃の国を行きゆかば在りしながらの母見るらむか」はこの集に収められている。中学生の土岐善磨は日比谷の草上で愛読したし、金沢にいた尾山篤二郎に感銘を与えた。翌三十九年に葉舟との共著『明園』が出るが、この頃から大正四年の歌集『濁れる川』までの三十代の約一〇年間は、小説が中心で、空穂の自然主義時代である。歌は小説の断片のようになる。明治四五年『空穂歌集』と名づけたのも、短歌との決別のつもりだった。

電報新聞の短歌の投稿者、十月会が大正三年に『国民文学』を発刊する。前田晁の命名で広く文芸を主としたものだが、もともと歌人の集まりだから短歌中心の雑誌になる。空穂に、先生が短歌から離れようとしたときに、十月会があつて、引き戻したようなものですね、と言ったら、そうだ、と言われた。この後に出る歌集が『濁れる川』（大四）である。それは歌らしい抒情で実感をすり代えてきたものを否定することから出発している。実感を誘ったもの、そのものに意味があるとした。それは歌と散文との境界線をたどるものである。

きちきちとかそけく時計聞え来つ胸熱くものを思ひてあれば
思ひ立ちし今の心を頼むべしそを措きて頼むものの無ければ
詩十自然派小説Ⅱ『濁れる川』である。

『鳥声集』（大五）は短歌にかえった落ちつきがあり、つぎの

『泉のはとり』（大七）は詞書は口語で文と歌とにつながりがあ
る。

湧きいづる泉の水の盛りあがりくづるとすれやなは盛りあがる
わが友の死にし通信を手にしつづ忙しき心起りたりけり

かへり見て我に付きくる妻（妻）子らを春の大路に見つづさびしき
大正六年、妻（三〇歳）は一〇歳と五歳の長男、長女を残して
死んだ。一年後、二、三か月の間に長歌一八、短歌三四五首を詠
んだ。歌集『土を眺めて』（大七）で、若山牧水は残る歌集は長
塚節『鍼の如くに』とこの集であろう、と言った。

貧しさの去らぬ家計薄つばらにもここの年を付けし人はも
銭湯に子連れ来たり小さき背を洗いやりつつあはれとは見る
真夜中をかすかに汽車の音きこゆ行くところありて走せつつあ
らし

わびしげの顔して帰りだまりてはマント脱ぎをるやこの日のわ
が子

米高く買ひはかぬなりわが子らよ大河の辺に行きて水飲め

『朴の葉』（大九）、『青水沫』（大一〇）を経て、大正一四年、改
造社から選集『楓の木』を出すことになり、『泉のはとり』から
『青水沫』までの四歌集を読み返して、客観性の不足を感じて成
るのが『鏡葉』（大一一）である。

これでわかることは、これまでの空穂には四つのピークがある
ことで、『まひる野』の浪漫、『濁れる川』の即人生、即現実、
『土を眺めて』の主情、そして『鏡葉』の客観である。この四つ
の峰は主観、客観、主観、客観となる。そしてその彼方に『冬日

ざし』あたりに明瞭に姿を見せる空穂自身に歌（文芸）があり、
素材によらぬ空穂世界が展開する。

ところで、空穂の身辺には、大正六年妻の死後、その妹
（二七歳）を妻とすることになるが、昭和三年、離別することになる。
前田晃は、その原因を心的異常として、事例を述べた。それらの
心の屈節がこの間の歌の陰影となっている。昭和五年林圭子夫人
（三五歳）を迎える。前田晃は言う。空穂の周辺から三人の候補
が考えられた。川島園子、丹沢豊子、林圭子である。この中、圭
子が、先妻に似ていたので推薦した、と。これからの空穂の身辺
は落ちつきを見せる。

さて、『鏡葉』（大一一）からの各歌集から若干首を抄出する。

『鏡葉』（大一一）

山なみのいただき貫く線の行はしいまに目にとどり難き
『青朽葉』（昭四）五節ぐらいの口語調の長歌に特色があり、歌
は平明のうちに深みを加える。

我が庭の一株白萩、今は無きかも。久しくも咲き継げる花、今
は咲かぬかも。清らにもすなはなりける白萩の花、目に立ちて
見えは来れども、今は無きかも。

『さざれ水』（昭九）、吉江喬松は序文に、空穂の円熟期とした。

大岡信は次の歌で空穂の短歌の回帰するがごとく複雑さを言っ
た。（窪田章一郎、森伊左夫編『窪田空穂全歌集』記念講演）
覚めて見る一つの夢やさざれ水庭を流るる軒低き家
『郷愁』（昭一一）

損得は知らざりし日の初一念宿命の路と歩むに老いぬ

岡の家に蒐蕒つくり八人の口すこす弥一兵に吐されぬ

髻振りてひそかに入り来しまろう人よげに秋の夜の灯はなつかしき

今の時に何の野球と思へども眼前のことは大いなるなり

『郷愁』からは空穂の文芸観として次の長歌を記しておくべきだろう。

友に寄す

文芸の名に隠れて、貴族趣味にあこがる人よ。我は思ふ。

文芸とは貴族の心を持ちて、平民の道を行ふものなりと。正直に、率直に、有りを有りとし、無きを無きとし、入用を拾ひ、不用を捨て、平易なる言葉をもて語るべきなりと。此の心人に好まると厭はるるとは問ふ所にあらず。我はただかく信じ、かく行ひ、足らざるをこそ恥づれ、いまだ疑ふ事を知らず。

作家水上勉は、その師宇野浩二に空穂を教えられ、この長歌は創作の上の指針としたと述べている。(水上勉『空穂私観』)

『冬日ざし』(昭一六)は山崎剛平の砂子屋書房ででている。『明燭』(昭二〇、青磁社)は次男出征をふくむ戦時詠、出版社から配給に回らぬうちに空襲で焼けた。その改版『茜雲』(昭二二)が佐伯仁三郎の西郊書房から出た。

『冬木原』(昭二七、空穂七六歳)

うしなへる何のあらむや我が経にし事のすべては今に続ける
気温とは寒暖計のものならず老いおとろへし皮膚の上のもの
秋日ざし明るき町のころよし何れの路に曲りて行かむ

しら菊の纏れては垂るる花びらのおのづからなるその乱れ見よ
独立を報じてラヂオ鳴り渡れ主都東京に起る声なし

『卓上の灯』(昭三〇)

明日をいはず昨日に触れずこころ深き笑み見する素白つと来ては去る

『丘陵地』(昭三二)

若妻の久子かなしも思ひ残すことなき死にを人は無し得ず

『老親の下』(昭三五)

老い痴れてただにまばたきして過ぐす我とはなりぬあるかなきに
この歌には事はない。空穂に文芸があるのだ。

この年、空穂八四歳、作歌活動は衰えず、現実を肯定し、空穂自身に歌があり、素材を必要とせぬ境地を持った。なお、数多い研究、論文、評釈は『窪田空穂全集』(角川書店二五巻)に収められている。

なお、現実肯定については私の『評伝』出版会の折、空穂は「村崎君はそれを積極的に肯定して戦場にも行ったがじつは諦めの伴ったものだ」と言われた。

三、老死

空穂の老と死の観は、私のやや長い宿題であった。「信濃教育」から空穂特集があったとき、これを考えることにした。それは『評伝』の完結でもあった。前年に林圭子夫人の歌集『ひくきみどり』が出ていて、空穂の近距離からの密着手材が可能となって

いた。

私は『さざれ水』のころから空穂に従ったが、その昭和六年、伊豆の山畑で詠んだ歌に

すかんぼの茎折り取りて老いしわれ嚙みに嚙むなり涙ぐましく
がある。このとき空穂五五歳、今から見れば随分早くから老を意識している。

すでに眺めた歌集のあとに、空穂には歌集五と遺歌集一がある。それは昭和二三年（七二歳）からで、空穂の行動範囲は少く、多くは玄関を入った四畳半の真四角の、中村正直の茶卓に坐つて、眼鏡で読書をし、原稿を書き、来客があると、その机上のものを傍らの小机に移して、茶卓として茶を飲み、煙草を吹かし、小庭の草木やそこにくる雀に目をやり、餌をまいたりした。来客が玄関に来ると、唐紙をへだててつつ抜けに聞こえた。私が玄関で帰ろうとすると、唐紙の向うで「村崎があがらないという法はない」と空穂が言った。

空穂の晩年の動きは少い。その心に去来するものは歌に留められている。短歌は抒情詩（空穂はジョジョウシと発音した）だから、これを見てゆけば、空穂の老死の観はわかるであらう。

空穂が老から進んで、死、命について述べたのは次の歌あたりであらう。

命一つ身にとどまりて天地のひろくさびしき中にし息す
『丘陵地』（昭二九、七八歳）の作。命とは天からのさずかりもの、自分でどうにもならぬものと見ている。この年五月二日には松本市城山公園の「鉦ならし」の歌碑の除幕式に出席して、人は

この碑の台石で下駄の雪を落とすだろう、と挨拶した。まだ死は意識にあがっていない。

三月のひかり日に日に深む時頼に死にゆくわが老いしどち
朝あさを目さむるやがて思ひ及ぶ命ありては生くる己れに
昭和三十一年、空穂の年来の友、前田晃、岩本素白が相ついで死去する。岩本先生がなくなられたとき、私は空穂先生からお手紙をいただいた。「岩本は森巖という顔をしていた」とあった。

岩本先生の夫人は、空穂が講師をした女子美術の生徒で、徳島出身であった。ふつうに素白の号は簡素清白と思うであらうが、そうではない。吉原の素遊び（酒肴のない）は素百文だが、それにも一文足りない、という意味だと、岩本先生が言われたよしである。江戸の名残の裏町を好んで歩かれた先生を思えばうなづかれるであらう。

老の身のそのことなく疲れては壊れゆくをば見まもるごとき
心かよふ人みな死にぬ命ながきことの忙しき思ひ息づく
翌三十八年、空穂八七歳、

冬さびて枯れたるとき冬木立しづかに命養へるなり
冬木立への感情移入。しづかに命を養う冬木立は作者の心の影であらう。

死期せまる身かと思へば翁われ慌てごころのなきにしもあらぬ
空穂は老について、次のように語っている。

最も切実に老を感じさせられたのは五十台であった。
六十台になると五十台はよかったなあと考えた。七十台になると、六十台はよかったなあとという嘆息は出たが、同時に諦

めもつて来た。人間の定命には限度がある。七十台は植物でいうと、花が咲いて散り、実となる時だ。どんな農夫でも、また植木屋でも、その時になって肥料をほどくす者は無い。無能は無能なりに、相応した収獲をすべき時だと諦めがついて来たのである。

八十台はその延長であった。……八十台になると老いは負担になる。……

九十台は老人以上の老人といったが、これは枯木の境涯である。……寿命など、我が物に似ているが、結局わが物ではなく、手のつけられない物である。……

空穂は自己の経て来た年をこのように述べている。昭和四一年、九〇歳を迎へた。一月、川田順（八四歳）がなくなった。大正八年（一九一八）夏、松村英一と共に越前、大和の旅の折、大阪の川田邸に滞在した。それは一月におよぶ長い旅で、二人はまだ単を着ていた。

夏、例年通り、軽井沢で過したが、微熱で、帰途、圭子夫人の甥、氏家病院に入院、四週間後に帰宅した。私がゆくと、空穂は奥の間に寝ていたが、「もう少しで、あっちへゆくかと思ったよ」と言った。このとき死を前に見据えて歌がある。

現在と尽末際との交りは病み弱りたるわが身の上にか
いならむ心を有ちて死ぬべきとあまた度おもひまたも思ふ
かな

新しき信仰もちてささげまつる在天の師が畏き雲を
釈宗演の禪的でもあるし、植村正久師からきたキリスト教的でも

ある。この年夏、中村白葉は信濃の夏季大学で「生きることと死ぬこと」について講演したが、控室で死んだ。

白葉はトルストイ研究家で知られるが、空穂の弟子でもあった。若い白葉が貿易商になって朝鮮にゆこうとしたとき、もう一年、東京で大きな文学をしてみないか、と空穂に言われて止った。作家村松梢風も、上海にゆこうとして、空穂に止められ、思い返して作品を書いて、上野のあたりをゆくと松の梢が風に鳴っていた。戦後（昭三二）、私が東京暮らしから帰郷しようとしたとき、「ちょっと来い、用がある」と空穂の電話があった。ゆくと「お前言え」と夫人から、ここに一〇万円ある。東京にいるようにのことであつた。私は、先生から金をいただいた人はありますか、と聞くと、夫人が、尾山さんが、と言いさした。尾山篤二郎氏は金沢に疎開して東京に帰れないでいた。私はこれらの人に比し、己れの才の乏しきを思つて、辞退して帰郷した。私は空穂から師弟というものを知つた。空穂は大人の風があり、人生の師でもあつた。

昭和四一年九月、空穂夫妻は軽井沢から別所温泉に移つた。九月十八日、中秋名月の歌が空穂にも、圭子夫人の『ひくきみどり』にもあつて、年代順に二人の歌を上下に記してゆくと、このところは二人の唱和のように見える。そして、これが二人で見る最後の名月となつた。

一〇月から一月まで空穂は健康で、歌集の整理などした。
われに後れあとより死なむ妻と思へさびしからむと心このる
咲きはやく散りいやはやき山茶花のさみしきさまの目に近きか

な

花の開落に空穂は心を托した。一二月臥床。昭和四二年「元日」に

わが吐けるシガーのけむり光帯び新しき年周辺にあり

空穂は豁然としていた。

命あるままに移りし齢なり命の齢なりわがものならず

空穂は天命にゆだねている。明け方、便意に起き、病苦に生が厭われた。

生を厭ふ身となりたりと眩げば哀しき顔して妻もの言はず
驚きてわれを誠む畏くも神の御手なる器ならずやも

植村牧師のキリスト教の影響がみえる。

たのしきもはた苦しきも過ぎぬれば夢にことならず無思惟に生
きよ

ここには禅的なものがある。春となった。「春暖」から

純白の白きはなびら群はなれ落ちゆくさまの静かさを見よ

桜花ひとときに散るありさまを見てあるごときおもひといはむ
死の観照として桜花がある。群をはなれるのは、ひと時に散るの

会員名簿の訂正

(正)

安藤常次郎 一八〇 武蔵野市吉祥寺東町一―一五―二五
兼築 信行 TEL (三四六―二三六九)
神田 龍身 一五七 世田谷区成城二―七―一
杉野 要吉 二一五 川崎市麻生区王禅寺二〇六三―六五

は、自分の死を見つめる作者自身である。空穂はこのようにして
死の四日前まで作品を残した。その四月八日の歌二首。

四月七日午後の日広くまぶしかりゆれゆく如くゆれくる如し
まづはただ意志あるのみの今日なれど眼つぶればまぶたの重し

この「まぶたの重し」が一万四千余首を作りつづけてきた空穂の
最後の語句である。四月一日夕方、異常、一二日心臓衰弱、夜
八時永眠。数え九一歳。明治、大正、昭和三代に亘った空穂の著
作は全集二九巻に収められている。歌集二冊についていうと、
長歌、詩三三一、短歌一四、三〇五、計一四、六三六首を数え
る。

夫人には空穂病床の歌が少い。そのことを言うと、人の苦しん
でいる歌を見るのはいやでしょう、と言われた。空穂の病苦を歌
にするにしのびなかったのであらう。

なくなられて後、圭子夫人に「先生は奥様に何とおっしゃられ
ましたか」とおたずねすると、「人にあわれまれないで生きよ、
と言われました」と答えられた。そのように今年八七歳の夫人は
健気に生きておられる。(八二、一〇、二〇)

鈴木 義昭 一九三 八王子市諏訪町一四―二八

TEL (〇四二六―五一―六五五五)

多田久実子 〇六四 札幌市中央区宮ノ森一条十一―二四―一

羽田 浩 七〇三 岡山市中井一四六

南 広志 TEL (〇七六六―七四―三九九八) 伏

木高